



**Data**

監督: 平柳敦子  
脚本: 平柳敦子/ポリス・フルート  
ン  
出演: 寺島しのぶ/南果歩/忽那汐里/役所広司/ジョシュ・ハートネット

### ■■■ショートコメント■■■

◆ニューヨーク大学大学院在学中に製作した短編が高く評価され一躍スポットライトを浴びた平柳敦子監督が、短編を長編化した本作では、ハリウッドコメディ界を牽引する豪華映画人も参加。カンヌ国際映画祭批評家週間に日本人監督としては10年ぶりに選出される快挙も達成した。そう聞くと本作は必見! そう思ったが・・・。

◆私には、43歳で独身、職場では空気のような存在という女・節子(寺島しのぶ)の孤独感はわからないし、そもそも関心がない。したがって、節子の更なる先輩が定年で退職する日のドタバタ劇(茶番劇)も、なるほどと思うだけだ。

それと同じように、節子の姉・綾子(南果歩)がとことん困り果てているワガママで自由奔放な一人娘・美花(忽那汐里)から誘われて英会話教室の体験コースに行った節子のその後の変化についても私はあまりわからないし、へえーと思うだけだ。ハグの大好きな教師ジョン(ジョシュ・ハートネット)からルーシーという英語の名前を付けられ、頭に金髪のかつらを被せられただけで、43歳の独身女がホントにあんなに変わっていくの・・・?

◆この英会話教室は何となくヘン。43歳の用心深い独身女なら当然そう思うはずだが、なぜ節子は大金を払ってまで、そこに通うことになったの? また、その勧誘が美花とジョンの狂言であり、美花とジョンは今アメリカのカリフォルニアにトンズらしてしまったことがわかった後、なぜ節子は大枚をはたいて美花に会いに行くというストーリーになるの? さらに、節子からそれを聞いた綾子まで、なぜ一緒にカリフォルニアまで娘探しの旅に出かけていくことになるの? そこらあたりのストーリーの構成はちょっと杜撰すぎるのでは・・・?

◆43歳の独身女・節子が、その性的欲求を如何に処理しているのかは知る由もないが、本作で節子がジョンに対して見せる「迫り方」は少し異常。ジョンにとっては若い美花の方がいいに決まっているし、本来、彼には妻子もいるのだから、節子のような特に魅力もないおばさんから迫られても・・・？しかも、カリフォルニアでは自分と同じ刺青まで掘られても、そりゃ困るばかりだ。更に、このおばさんがちょっと異常だと思うのは、「もし、私とジョンが寝たとしたら・・・」と、美花にしゃべること。それにショックを受けた美花のその後の行動も異常だが、このおばさん、ちょっと頭おかしいのでは・・・？私にはそうとしか思えなかったが・・・。

◆役所広司は『Shall We Dance?』（96年）では社交ダンスの教室に通い、それにのめり込む中で新たな人生に目覚めるというすばらしい役を演じていた。また5月12日から公開される『孤狼の血』（18年）では、「警察じゃけえ、何をしてもええんじや」の名セリフが今から楽しみだ。しかし、ルーシーと同じようにかつらを被り、英語名を名乗る本作での小森の役はイマイチ。小森が教室内ではじめて出会った節子に好意を持っていることは明らかだが、それは一体なぜ？1度や2度英会話教室で一緒に勉強しただけの縁で、節子の家まで訪ねていくことなんてことがホントにありうるの？

孤独な中年男が孤独な中年女に一目で惹かれたという筋書きはわからないでもないが、そんな本作の構成も少し安易すぎるのでは・・・？

2018（平成30）年5月10日記